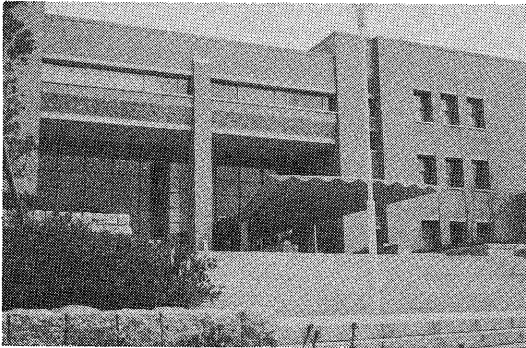


関西大学図書館

関西大学に新しく建った図書館・情報処理センターを去る3月に訪れた。

落ちついたキャンパスに円形建物が二つあった。村野藤吾(1985没 日生劇場、品川プリンスホテル新館、有楽町そごうなど設計)になる図書館建築であった。

大学の正門を入ると直ぐ左側に新しい図書館が偉容を誇っている。扇状をした平面の突出した庇が人を招き入れる。



建築法規上の高さ制限があるために3階建て、高さは16m。図書館として必要とする22,000m²の約半分の面積は地下階にとられている。1階の中央から西側はすべてレファレンス室、東側は事務室。2階は中央がレファレンス室で、東、西側共開架閲覧室。3階は視聴覚施設がある図書館ホール、一般閲覧室、貴重書室など。地下は1、2階共、大半が書庫で占められ、書庫は機械室、情報処理センター及び研究個室で囲まれている。書庫を水と湿気から守るための方法として対策

が立てられたものである。

図書館業務上の設備としての特色は、自送式書籍搬送設備があること。書庫内に8ヶ所、メインカウンターとレファレンスカウンターの各々にステーションがあり、出納業務の迅速化を目ざしている。

メインカウンターと開架カウンターのところにはブック ディテクション システムが設置されている。

建物の外観は、今までのキャンパスのトーンと異って、コンクリートの上にレンガ半枚積みが施されているので、レンガ固有の色彩が一際目立っている。

「何故、新しい図書館は今までの設計者と変わって鬼頭梓氏の設計になったのですか」と私は案内役の運営課長濱瀬氏にたずねた。

「本は四角いものです。円い平面に四角いものを置くのは甚だ都合が悪いものなのです」

が、旧図書館は両方共平面が円でしたのでこんどはどうしてもこうなったのです」と。

新しい図書館が設計される時、既存のキャンパスを大いに意識したであろうことは間違いないと考えるが、今少しトーンが同調されても良かったなと感じた。鬼頭梓氏は図書館建築の設計では斯界では第1人者。大学図書館のあり方を学ぶには十分手応えのある作品で一見に價するものであろう。

(元当館職員 現在建設省関東地方建設局営繕部 精木勇)